

豊かな心を育てる教材

# 新ふるさと的心

中学校



香川県教育委員会

豊かな心を育てる教材 新ふるさと的心

【中学校】

- ◆ 「さぬきの夢 二〇〇〇」誕生 ..... 1  
一―(二) 希望・勇気・強い意志
- ◆ 自分を信じて ― 齋賀富美子 ― ..... 6  
一―(三) 自主・自律
- ◆ 手袋てぶくろにかける ..... 11  
四―(五) 働くことの意義と尊さ
- ◆ 島にアートがやってきた ..... 16  
四―(八) 郷土愛
- ◆ 塩田開発の父 ― 久米通賢くめつうけん ― ..... 21  
四―(八) 郷土愛

## 「さぬきの夢 二〇〇〇」誕生

「おいしいなあ。やっぱり。」

「うまいじゃろ。やっぱり、ここのうどんが一番やな。ここのは、昔のうどんの香りがするわい。」

おじいさんと孫が、うどん屋さんでさぬきうどんを満足そうにすすっていた。

「こだわりの店ってのぼりが出てたよ。『さぬきの夢二〇〇〇』って、なあに。」

男の子は、店の中にもその看板を見つけて、おじいさんに尋ねた。

「あれはな、地元で取れた小麦を使っているという証拠や。昔は、うちやって麦を作った。わしが子どもの頃は、その麦でうどん作るのが楽しみやったなあ。一家そろってうどんをうって、麵をゆでるときのあの香りは忘れられんなあ……。ここのうどんはあの香りがするんじゃない。さぬきの夢二〇〇〇っていう香川県産の小麦を使っとるけんらしいぞ。」



昼ごはん時のうどん屋で、隣の席からこんな会話が聞こえてきた。それを聞いた私と同僚のY君は、顔を見合わせてこみ上げる笑みを隠せなかった。

「さぬきうどん」の麺は、塩と小麦、そしてだしは、いりこやしよゆなど、香川の風土がはぐくんだ特産物から作られ、品質・味・生産量も日本一を誇る。現在も、うどんの年間消費量は一人当たり二三〇玉と、香川の暮らしに根付いた食文化の一つであり、近年は、「うどん王国」として全国から多くの観光客が押し寄せている。

一九六三年「うどん王国」は危機を迎えていた。長雨により、地元の小麦が壊滅状態になったのである。それ以降、安価で安定した量を購入できることに加え、色が白く粘りがあることから、うどんには外国産の小麦が使用されるようになっていた。

一九八六年、香川県にしかない真正正銘の「さぬきうどん」を作りたいという声が、うどん職人から生まれた。また、小麦の生産量の減少に歯止めをかけるためにも、地元に合わせてうどん用の小麦の新品種を開発するよう、一九九一年、県農業試験場の私たち二人に命が下ったのだ。

小麦の品種改良には挑戦したことすらなかった。「そういえば、うどん作りがこれだけ盛んな香川でどうして今まで小麦の品種改良に取り組まなかったんだらう。」そう首をかしげる私に若いY君は、「僕たちでチャレンジしてみましようよ。未知の分野だけど、きつとおもしろい研究になりますよ。」と、声を弾ませた。

私たちの品種改良の作業は、大変な緻密さが要求されるものであった。

麦の花が咲き始める頃、まず穂の中ほどを4、5cm切り取って、強い花だけにする。次に、わずか

数mmの花の中間を切り、そこから2mmほどのおしべを3本、ピンセットで取り除く。そして、花の中のめしべに、トウモロコシの花粉を筆の先につけて受粉させる。一本一本の麦の穂の中の一つ一つの麦の花を扱う<sup>あつか</sup>気の遠くなるような作業だった。そうして、約2週間後にその結果は見える。ふくらんできた実から「胚<sup>はい</sup>」という種の部分を一本の穂ずつ一つのシャーレに置いてその胚から育てていこうとしていた。しかし、その胚ができない。やったものすべて失敗だった。そのうえ、二人とも極度の花粉症<sup>かふんしょう</sup>に悩<sup>なや</sup>まされるようになる。涙<sup>なみだ</sup>、鼻水、時には腕<sup>うで</sup>や顔に発疹<sup>はっしん</sup>が出たり、夜眠れ<sup>ひび</sup>なかつたりするひどい症状も続いた。さらに、「一向に進んでないじゃないか。どうなっているんだ。」「足りないことはあっても何とかしろ。」周囲からのプレッシャーもあり、逃<sup>に</sup>げ出<sup>だ</sup>したくなる日々だった。

「どうしたらいいんだ。一つも成功せんとは……。」

「何でできんのかわからん。調べたとおりにやつとるのに……。」

五千回を超える作業をしても一度も成功しないことに、私たち二人は途方<sup>とほう</sup>に暮れていた。

「たった五年で開発しろというのは、絶対無理ですよ。それに、設備も人手もお金もなさすぎます。」若いY君は、泣きそうな顔をしてこちらを見つめていた。

「品種改良というのは、そんなに簡単にできるものじゃない。どんなことができるかはわからんが、運を信じて、まあいろいろやってみようや。たくさんの方の期待がかかっているんやから。」そう言うのがやつとだった。

研究を始めてから約一年、のべ一万回以上の作業を繰り返<sup>かえ</sup>した。焦<sup>あせ</sup>るばかりの毎日が続き、気分転<sup>てん</sup>換<sup>かん</sup>になれば……と思つて、研修のために長野県へ出かけた。

※トウモロコシの花粉を使うと、品種改良の時間を縮めることができる。

「あれ、自分たちがやってきた切り方となんか違うなあ。」長野での作業を見ているうちに、ほんのわずかな切り方の違いに気がついた。

「あのっ。こちらでは、花を切る部分は真ん中からではないんですか？」すぐに、長野の研究員の人に尋ねてみた。

「いやっ、花の先端をカットしているよ。」と、不思議そうに答えてくれた。

「やったあ、見つけたぞ。きつとこれだ。設備や経験不足ではない。この数㎖の差が大きな差になっていたんじゃないか？そうにちがいない。」

香川に帰って早速試してみた。その結果が出るまでの約2週間、時間がとても長く感じた。おそろおそろのぞいた顕微鏡には、小さな粒が光っていた。

「あっ、あるぞ。胚が……。」私は、上ずった声でそう叫んだ。

「えっ！。ほんとだ。ほんとに胚がある。やったあ。」Y君は、小躍りして言った。

今までの苦勞が、すべて報われた気がした。そして、いろいろと調べていくうちに、花の中の湿度の微妙な変化が成功の条件の一つになっていることがわかってきた。

「やっと見つけたな。ようやくスタートラインだ。これからが本番だ。」今までの努力が実を結んだことを実感した。



その後、たくさんの失敗と数少ない成功を繰り返す中、作業が成功する条件を次々と見つけることができた。作業ができる時期は限られることから、作業ができる日は休みなく働いた。一つでも多くの品種を改良し、できるだけ多くの数の中から、この開発の目的であるさぬきうどんに最も適した品種に巡り合いたいと、私たちは考えていた。できる限りの設備を整え、時間や手間をかけることを惜しまなかった。周りの人からの声は相変わらず厳しかったが、私たちは、迷いもなくなり、充実感をもって作業に取り組むことができるようになっていた。

開発を始めて三年後、私たちは幸運にも四千種以上の新品種を開発することができた。この頃から、品種改良だけでなく、それ以外の研究が必要になってきた。この四千種の中でうどんに最も適したものはいずれかを選別する作業、できた小麦を粉にする製粉作業、またその小麦粉でうどんを打つ作業などである。こうしたたくさんの人たちの力によって「さぬきの夢二〇〇〇」は生まれた。

この名前には、香川の特産物であることと関係者の長年の思いが込められている。

二〇〇一年六月、多くの人の力を経て「さぬきの夢二〇〇〇」は、六十三トン収穫された。二〇〇八年には五千トンを超える収穫量となった。しかし、これはさぬきうどんの生産量からするとたった5%にしか過ぎない。生産量はもちろん、まだまだ品質の開発は終わらない。「さぬきの夢」の、さらなる開発は今も続いている。

## 自分を信じて

— 齋賀富美子 —



二〇〇七年十一月三十日、この日六十四回目の誕生日を迎えた齋賀富美子さんは、国連本部で行われた国際刑事裁判所（ICC）裁判官の選挙でトップ当選し、日本人として初めて、アジアの女性として初めて、国際刑事裁判所裁判官になりました。なぜ、彼女が選ばれたのでしょうか。

一九六六年、私は、外務省に入省して、三ヶ月間の外務研修をノルウェーで受けた後、ノルウェー語の研修のためオスロ大学に入学しました。そして、大学での二年間の研修後、ノルウェー大使館に留まりました。

当初、ノルウェーの人はみんな英語ができるので、私もいつい英語で話をしていました。でも、このままではいけないと思い、大学で勉強するだけでなく、ノルウェー国内の旅行やノルウェー国会の傍聴に出かけました。とにかく私はノルウェー語をマスターすることに全力を尽くしました。そのうち、ノルウェー語の方言を聞くのもおもしろくなってきました。英語ではあまり話さなかった人がノルウェー語だと一気におしゃべりになって、大使館での仕事においても、いろいろ細かなことまで教えてくれたり、議会の傍聴でも、報道の人や議員からいろいろ情報も入ってきたりするようにになりました。当時、ノルウェー語のできる外交官がいたのはアメリカとソ連と日本だけでしたし、女性外交官は私だけだったので、「ノルウェー語をこんなに話せるアジアの人は見たことない。」と言われ、

※国際刑事裁判所……二〇〇二年設立。日本加盟は二〇〇七年。個人の国際犯罪を裁く常設の国際司法機関。

オランダのハーグに本部を置く。略称はICC。

たいへん重宝がられました。相手の国を本当に理解し、信頼を得るには、相手国の言葉を学ぶことだと実感しました。

これまで私がしてきた仕事は、必ずしも自分から希望したものばかりではありませんでした。

一九九八年、埼玉副知事のお話をいただいて、「なぜ私なの？」と思っていたところ、当時の上司の「地方行政の経験はきつといい勉強になる。」という言葉を信じて、思い切ってニューヨークから埼玉県に向かいました。東西に広い埼玉県の、それぞれに特徴のある市町村を訪ねて歩くたびに新たな発見があり、新しいご縁を得ることができ、本当に多くのことを学ぶことができました。

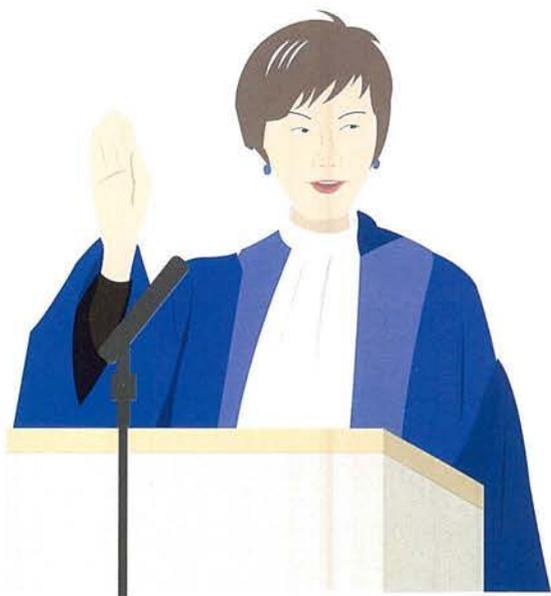
二〇〇五年、初代人権担当大使に任命された時、誰より驚いたのは自分自身です。日本人拉致問題についても政府の資料や報道を通じてしか知りませんでした。しかし、私がそれまでの仕事で培ってきた人脈を生かすことによって国際世論を動かし、人権問題に取り組む必要があると考え、日本人拉致問題の解決などに臨みました。

二〇〇七年、ICC裁判官のお話は、私にとってまさに青天の霹靂でした。「なぜ私ばかり……。」と、最初には固辞したのです。もう外務省を辞め、日本に帰りたいと思っていた頃でもありました。国際刑事裁判所は刑法の専門家が携わるといイメージがあり、弁護士でもない私には、縁遠いと思っていましたし、裁判について一から勉強しなければならぬのです。またしても、新しい

※人権担当大使……日本政府が、国際会議などの場で拉致事件など人権問題の交渉役として設立した役職。



仕事のスタートです。外務省関係者から、「あなたしかいません。」と言われても、なかなかそうは思えませんでした。「どうしよう。」と、とても悩みました。けれども、裁判といっても、扱う犯罪はほとんどが人道に対する罪で、中でも女性に対する暴力、子どもに対する暴力などの人権関係が多いことを知りました。人権問題には長く携わってきたので、自問自答するうちに、まったく未知の世界ではないという気がしてきました。そこで、今までの経験も活かせるということで「チャレンジしてみよう」と思うようになりました。自分のできることで、国際社会に貢献しようと思えました。



裁判官に選出された時、私は自分の果たすべき役割について考えました。国際刑事裁判所（ICC）という若い組織の組織づくりに貢献していきたい。そして、国際社会全体が重大な犯罪を犯した個人を処罰していく流れをつくりたい。『不処罰の文化』を止めるということにできるだけ多くの国が賛同するような雰囲気をつくりたい。特にまだそうしたことに積極的ではないアジアの国々の加盟を促進していきたい。現在はそう考えて職務を遂行しています。



裁判所在任中の二〇〇九年四月、オランダの地で突然彼女は亡くなりました。お別れの会で、同僚だったシモンさんが、彼女の<sup>ひとがら</sup>人柄、仕事ぶりをたたえ、次のようにお別れの言葉を結びました。

「齋賀裁判官は確かにここにいらっしやいました。なぜなら彼女には、ここでなすべき仕事があったからです。彼女は知性に満ちあふれ、そして礼儀<sup>れいぎ</sup>正しく、尊敬<sup>そんけい</sup>すべき振る舞<sup>ま</sup>いで仕事に励<sup>はげ</sup>んでいらっしやいました。それが彼女を有能な人に、そして共に働くことが喜ばしく、とりわけ同僚から愛される人にしていたのです。」

生前、彼女はそれまでの自分を振り返り、雑誌の取材で次のように語っています。

「これまで、仕事で性別を意識したことはありませんでした。新しい分野に挑<sup>ちようせん</sup>戦する時は、常に『On the Job Training』が私の信条です。」



齋賀富美子さんの経歴

- 一九五六年 丸亀市立城西小学校卒業
- 一九五九年 丸亀市立西中学校卒業
- 一九六二年 香川県立丸亀高等学校卒業
- 一九六六年 東京外国語大学英米語学科卒業
- 一九六六年 外務省入省
- 一九八三年 国際連合日本政府代表部 一等書記官
- 一九八八年 国際連合局社会協力課 首席事務官
- 一九九二年 在デンマーク日本国大使館 参事官
- 一九九六年 国連代表部公使
- 一九九八年 埼玉県副知事
- 二〇〇〇年 在シアトル日本国総領事
- 二〇〇一年 国連女子差別撤廃委員会委員
- 二〇〇二年 国連代表部大使
- 二〇〇三年 在ノルウェー王国特命全権大使  
在アイスランド共和国特命全権大使
- 二〇〇五年 人権担当大使を兼務
- 二〇〇八年 国際刑事裁判所裁判官
- 二〇〇九年 逝去



中学校最後の運動会のリレー 左端が齋賀さん



中学校卒業式の日

## てぶくろ 手袋にかける

「あーあ、何で手袋会社なんや！三丁目のラーメン屋がよかったのに！」真人は、秀明に向かってぼやいた。

「俺やって、隣のケーブルテレビが第一希望だったんや。手袋会社なんて年配の人達しかおらんのやろうなあ。」

秀明も、ため息をつきながらそう答えた。

同級生の二人は、来週から始まる職場体験活動の打ち合わせをするため、訪問先の手袋会社に行くところだった。当初希望していた飲食店やテレビ局は、体験希望者があまりにも多く、全員が希望通りというわけにはいかなかった。担任の山口先生から、

「手袋会社はどうや？ 知り合いが働いとるけど、おもしろいらしいぞ。」

と声をかけられた時、真人も秀明も、どうしても嫌だとは言えなかったのだ。

重い足取りで会社の玄関に入った二人を迎えてくれたのは、山口先生の教え子だという若い男の人だった。緊張しながらあいさつをする二人に、男の人は、

「ここで手袋のデザインをしている工藤です。担当の森さんがもうすぐ来るから、それまで僕に何でも聞いてよ。」

と、声をかけてくれた。

そこで、まず真人がいくつか質問をした。

「この会社のみなさんは、具体的には、どんな仕事をしているんですか？」

「大きく分けると四つかな。手袋のデザインをする人、それを実際に作る人、でき上がった製品を



販売する営業の人、それと材料やお金の管理をする人。それぞれが協力し合って、手袋ができていますよ。」

「仕事をしていて、うれしいことや、逆につらいことって何ですか？」

「そうだな、休みの日にデパートの売り場をのぞいて、自分がデザインした手袋をお客さんが手にとって買っていく様子を見た時は、心の中でガッツポーズするぐらいうれしいよ。逆に、たくさん売れ残っているとショックだな。何がいけなかったのかなって、悩む日は何日も続く。もう投げ出したくなるよ。」

そうやって、工藤さんは笑った。

秀明が、ずっと疑問に思っていたことを、思い切ってたずねてみた。

「この町は、手袋産業で有名だけど、だんだん衰退しているって聞いたことがあります。どうして、若い工藤さんが、この仕事を選んだんですか？」

「うーん、そうだな……。」

少し間をおいて、工藤さんは静かに語り始めた。

「大学卒業後すぐは、わりと有名な広告代理店にデザイナーとして就職したんだ。働き始めて二年目の夏だったかな。ちよつと疲れて帰省した時、以前から知り合いだった森さんにばったり出会った。君たちを担当してくれる、ここの営業の人だよ。近況を話し合ううちに、僕自身の仕事の悩みも打ち明けた。その時、森さんから、香川に戻って、一緒に手袋を作らないかって誘われたんだ。」

『若い人はここを嫌って、すぐに都会に行きたがる。だけど、この町には世界に誇れる地場産業があるんだ。君のデザインの才能は、なかなかのもんだ。それを生かして、手袋業界を、もう一度盛り立てていかないか。』

そう言ってくれたんだよ。あの言葉は今でも忘れられない。あの時、初めて僕の心の中で、自分の大好きなことで、生まれ育った地元之恩返しができるかもしれないという気持ちだが、わいてきたんだ。」

ちやうどその時、事務室のドアが開いた。森さんであった。

「遅くなってごめんよ。君たちがうちに職場体験に来てくれる子だね。中学生が、手袋に興味を持ってくれるなんて、本当にうれしいよ。」

真人と秀明は困ったように顔を見合わせた。

「うちの会社について知りたいことがあれば、何でも説明するよ。」

そう微笑む森さんに、真人が聞いた。

「この会社の自慢できるところや、苦労している点は何ですか？」

「一番の自慢は、それぞれの担当の人たちが、他の担当の人たちのことを思いやりながら、自分の事に責任を持って取り組んでいることかな。そうだ、これを見てくれるかな。」

工藤さんが分厚いノートを差し出した。真人が手にとってぱらぱらとめくると、そこには雑誌の切り抜きや写真、洋服のスケッチ、そして手袋のデザインらしきイラストが数え切れないほどあった。

「時間ができると、僕は街中を通る人たちのファッションを観察したり、いろんな雑誌で今年の流行をチェックしたりする。あの女の子が来ているセーターの色や柄には、こんな感じの手袋が似合うかなとか、あのおじいさんの雰囲気だと、このデザインなら気に入ってもらえるかなとか……。そうやって考えながら、手袋のデザインを、そのノートに描きためていつているんだよ。」

工藤さんの言葉にうなずきながら、森さんが話を続けた。

「僕が担当している営業の仕事は、また違った苦労がある。せっかく仲間の努力で出来上がった手袋を、少しでも多くのお店に置いて売っていただくために、たくさんの人に会いに行く。時には、うるさながら



れて、ひどい言葉をあびせられたこともあるよ。でもうちの手袋の素晴らしさをわかってもらうためには、誠実な態度で粘り強く説明して、相手に信用していただくしかないんだ。」

秀明は、思わず、

「手袋を作って売るのが、そんなに大変なことだって、僕、今まで全然知りませんでした。もっと単純で、つまらない仕事だと思ってたのに……。」

とつぶやいた。

「ははは、正直だな。確かに手袋業界は、今、大きな局面を迎えている。この不況だろう？ 食べ物なんかと違って、手袋がなくても、人は生きていけるし、何より今は外国から安い品物がどんどん入ってきている。今までと同じ事をやっていたんじゃないんだ。」

「それは、どういうことですか？」

と真人が聞き返すと、答えてくれたのは、工藤さんだった。

「防寒用だけじゃなくて、夏の強い紫外線から腕を守るための手袋。それから、最近では、はいたまま携帯電話を簡単に操作できるように手袋を開発している。手袋の技術を生かして、他のウェアやバッグも作り始めているんだよ。」

最後に秀明は、二人がこの会社ですつと仕事を続けている理由を聞いてみた。

「他のどの物よりも、やっぱり香川の手袋は品質が良いと、認めてくださるお客様がたくさんいる。手袋は、



紫外線から腕を守る手袋



はめたままタッチパネルを操作できる手袋

香川県が世界に誇れる地場産業だよ。それを、この町の小さな会社から、自信を持って発信し続けている。その思いが、二十年近くこの仕事を続けてこられた、一番のエネルギーかな。」

と、森さんは少し照れたように答えてくれた。

「僕は、仕事で一度挫折したけど、地元に戻って自分のやりたいことをやってみつけることができた。仲間と信頼し合って、助け合いながら、一つのをみんなの力で作り上げていく。大げさかもしれないけれど、それが今の僕の生きがいで、ずっと追い続けていきたい夢なんだ。」

そう語る工藤さんの目は、生き生きと輝いていた。

その後、来週からの三日間の体験活動について、細かな打ち合わせをしてから、真人と秀明は会社をあとにした。

「俺、手袋に興味があって、訪問先を選んだんと違うのに、森さんをだましましたみたいや……。」

そう、ぼつんと口にした真人に、秀明が笑顔で答えた。

「ええやん、これから実際に仕事を手伝わせてもらって、もっと手袋産業のこ」と知ったら。俺たち、いい職場体験ができそうな気がするな！」

「そやな！」

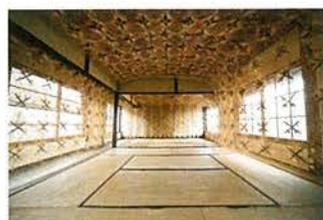
来週からの活動のことを考えると不安もあったが、二人の心の中には、明るく、はずむような思いがあふれ始めていた。



島にアートがやってきた



オンバ・ファクトリー  
写真：中村 脩



うちの骨の家／西堀隆史  
写真：中村 脩



漆の家／漆の家プロジェクト  
写真：中村 脩



思い出玉が集まる家／  
川島 猛とドリームフレンズ  
写真：中村 脩

僕たちの住む男木島は、高松市の沖合、約八キロメートルに位置する、周囲五キロメートルの小さな島だ。高松港から「めおん」というフェリーに乗って約四十分で男木港に着く。人口は約二百人で、そのうち約六十パーセントが六十五歳以上の人だ。僕たちの中学校は全校生が三年生三人だけで、小学生はいない。

島内に平地と呼べる場所はほとんどない。海岸からすぐにはじまる急斜面に、民家が密集して建ち並んでいる。そのすき間を縫うようにある坂道は、細く曲がりくねり、迷路のようになっていて、

主な産業は漁業と畑を使った農業だ。

島の北端には、一八九五年に建設された御影石（花崗岩）づくりの灯台がある。今も一日に千二百隻の船が行き交う備讃海域の安全を現役で守っている。

こんな男木島に二〇一〇年、十万人もの人がやってきた。

「瀬戸内国際芸術祭二〇一〇」が「海の復権」をテーマに七月十九日から十月三十一日までの一〇五日間、直島、豊島、女木島、男木島、小豆島、大島、犬島および、高松港周辺を会場に開催されたのだ。来場者数は、約九十三万八千人。十八の国と地域から七十五組のアーティスト・プロジェクトと十六のイベントが参加した。

この芸術祭を通して、僕たちのふるさとに対する思いは大きく変わった。

男木島が開催地の一つに選ばれ、ディレクターさんから、「アートで島は元気になります。男木島のすばらしさ、瀬戸内海の魅力を世界に発信しましょう。」という話を聞いた。どうもスケールが大きすぎるので、島の人たちも「話半分で聞いとつたらええやろう」と思っていた。

「アートって何や？そんな新しげなもんが、こんな島にあうんか？」

「高松からでもそんなに人や来んのに、全国や外国から、わざわざ男木に来るとは思えんの。」「わけのわからんおかしげな人が来たら困るぞ。」

島の人たちは、皆それぞれにとまどうばかりだった。

一月の日曜日。こえび隊（ボランテイアサポーター）七名が乗った「めおん」が港に到着。トラックに積み込んである資材を空家まで手作業で運び、午後は、空家の大きな家具やすごい数のゴミを港のトラックまで運んだ。その後も、展示に使う空家を何日もかかってきれいにしてくれた。

アーティストの制作過程を見たり、こえび隊の人たちと一緒に制作のお手伝いをしたりと、いつの間にかアートが僕たちの身近なものになっていた。

約六千枚のうちわの骨で覆った「うちわの骨の家」は、もと駄菓子屋だったこともあり、制作中は島の人々が懐かしがって立ち寄り、昔話に花が咲いていた。また香川の漆芸家たちによる「漆の家」や香川出身の川島猛さんの「想い出玉の集まる家」など、何年も使われていなかった空家が姿を変え、人々の集まる場所になっていった。

路地には、カラフルな壁画が現れ、バケツやたらいから雨が降ったり、数十メートル離れた先から人の声が聞こえるパイプが顔を出したりしている。

現代アートと一緒に見る島の風景は、はっとするほど新鮮で美しく、また、一つひとつの作品がびつたりとその場所に溶け込んでいて不思議な感じがした。

なんといっても、島の人々に喜ばれたのは、香川在住の作家五人が開いた「オンバ・ファクトリー」だ。オンバ（乳母車）は、坂道だらけの男木島では、ものを運搬するにはなくてはならないものだ。島の人が使っている古いオンバを改造したりペイントしたり無料で作り替えてくれるのだ。カ

ラフルなオンバをうれしそうに押おしているおばあさんを見ると、こちらまで楽しくなってくる。用事がなくてもオンバをみんなに見せるために押おしているのではないかと思うときもある。

「どうもディレクターさんの言っているのは本物らしいぞ。」

「男木島が笑われんようにせんと。」

「ようけ来てくれたらええの。」

「たこ飯を作ったら喜んでもらえるかな。」

島の人たち皆みなが、島にやってくる人たちのために本気でアイデアを練っていた。

僕ぼくたち中学生も「島こころ椅子いすプロジェクト」に参加し、豊玉姫神社とよたまひめの拜殿はいでん前に「海の幸うみと山の幸やま」をテーマに椅子をつくり並べた。また、初めて島を訪おとずれる人たちが歩きやすいように手作りのガイドブックを作り、配くることにした。外国から訪れる人のために英語版も準備した。

そして、一年前には想像もなかった時間が過ぎていった。ディレクターさんの話のとおり、ほんとうにびっくりするほどたくさんの方が男木島にやってきた。

「こんにちは。」

「こんにちは。どこから来たんな？」

「東京からです。」

「まあまあ、遠いところから、ようおいでたなあ。」

「とつてもいいところですね。」

「そうな。ありがとう。暑いから気をつけてな。道はわかるかな？」

「はい。ありがとうございます。」

いつもは不便な狭い路地も、一休みする坂道も、言葉を交わすのにはちょうどよかった。島のあちこちで笑顔があふれた。

僕たちの作ったガイドブックも好評で、追加の印刷をした。

たくさんの人に支えられて、十月三十一日、瀬戸内国際芸術祭二〇一〇は閉幕した。

その後の話も少し聞いてほしい。

二〇一一年三月。僕たち三人の卒業式の後、男木中学校の休校記念式が行われた。多くの島の人が中学校の思い出を振り返り、休校を惜しんだ。時代を追った写真の上映とともに、こえび隊による音楽隊が「ふるさと」や「仰げば尊し」を演奏してくれて、みんなで合唱した。

五月。男木島で三十二年ぶりの結婚式が行われた。瀬戸内国際芸術祭に来たカップルが「こんなすばらしいところで結婚式が挙げられたらいいね。」と言ってくれて、実現したのだ。島の人たちが段ボールで長持ちを作り、「男木伊勢音頭」を歌いながら、新郎新婦の後ろに付いて島内を練り歩いて祝福した。

芸術祭の後、そのまま島に残り、活動を続けるアーティストもいる。その人たちの呼びかけで、地引網やびわがり、盆踊りなどいろいろな人に男木島に来てもらって、島の人たちとの交流が広がっている。

芸術祭を通して、僕たちは、改めて男木島のすばらしさに気づくことができた。僕たちは、二年後の瀬戸内国際芸術祭をとっても楽しみにしている。

## 塩田開発の父 — 久米通賢 —

讃岐高松藩々主松平頼恕が坂出塩田の工事現場を視察に訪れたのはこれで何度目であろうか。その日は朝から相当に激しい雨が降っていたが、頼恕は用意された席に着くとすぐ

「栄左衛門をよべ。」  
と命じた。

栄左衛門とは、郷普請奉行の久米栄左衛門のことである。今回の坂出塩田開発のすべてを任されている人物で、本名を「通賢」といい、栄左衛門は通称であった。

「がんばっているな。」  
頼恕は同行した藩の重役に声をかけた。工事現場では、雨にもかかわらず、数千人の人々がいきいきと働いている。

しかし重役はそれには答えず、何か恐ろしいものでも見るように海のほうを見つめていた。彼には、この工事で完成する塩田というものが、あまり具体的には想像できないらしい。

当時、塩をつくるためには海水を太陽の力で乾燥させ、残った塩分を採集する方法がとられていた。塩田とはその海水を乾燥させるための、いわば巨大な浅いプールである。

このとき栄左衛門が作ろうとしていた塩田はおよそ百三十二ヘクタール。それだけの面積に土手を築き、水門を設けて、海水の出入りを調節しなければならぬ。想像もつかない規模である。すでに二万両（今日の五億円ほど）もの大金が藩主の手元金（個人的な費用）から出費されていた。高松藩の財政はこの時期最悪の状態にあり、武士たちに対して儉約の命令も出され、とてもこのような大金

を藩の正規の予算から出すことのできる状態ではなかったのである。このような大工事が本当に藩の財務の助けになるのか。重役の心には大きな疑問があった。

「久米栄左衛門でございます。」

その声にふりむき、平伏している男に視線を向けた重役は思わず、驚きと、怒りの混じった声をあげた。

「栄左衛門。なんじゃその姿は。」

見れば、雨の中、水たまりの側で座っているその男は、髪を縄でくくりつけ、ぼろぼろのはんてんの上に蓑をかぶり、帯はわらなわである。しかも、わらじすら履かず、はだしの足はどろだらけであった。

「殿の御前であるぞ。何といういやしい姿だ。」

場所がらをわきまえろ。」

重役の言葉に、栄左衛門は地面を見つめたまま静かに答えた。

「わたくしは、毎日この姿でみんなに指示をあたえています。決して無礼をはたらこうとして、わざわざこの姿をしているわけではありません。」



この身を投げうっての意気込みがあればこそ、人々もあのよう  
に元気に働いてくれると、思っております。」

この言葉に重役は一瞬たじろいだ。だが彼には栄左衛門の言  
い分を認めてやる余裕がない。そもそもこの工事自体に彼は反  
対であった。栄左衛門が自分から建白書を差し出し、自分で計  
画した工事である。もし、成功すればすべて栄左衛門の功績と  
なるであらう。

「栄左衛門、よく聞け。そなたは仮にも讃岐高松藩十五万石の  
奉行職にある身。その奉行たる身が、そのような姿で人々の前  
に立てばどうなる。藩の権威も、殿の御威光も、人々は軽く考  
えるようになるではないか。そなたは郷普請奉行としてこの工  
事のすべてを任されていることを忘れたのではないか。」

栄左衛門ははじめて顔を上げ、重役を見た。その目に怒りの色はなく、あくまでも冷静である。

「わたくしは、郷普請奉行であるからこの工事を指図しているのではありません。この工事はわたく  
しから殿様にお願ひし、やらせていただいているのであります。それは、この塩田の完成が、讃岐の  
すべての人々の助けになると信じているからです。」

「何を言う。この藩の財務の苦しい中で、殿様から二万両もの大金をいただき、奉行としてではない  
などとよくも言えたな。」

「二万両はたしかに大金……。」



と、そこまでいって栄左衛門は口をつぐんだ。目の前にいる頼恕をはばかったのである。殿の手元金から下された二万両はこの時既に底をついてた。栄左衛門は工事を続けるため、自分の屋敷や土地まで借金の抵当に入れていた。そのことをこの重役は知らないのだろうか。あるいは知っているが知らぬふりをしているのだろうか。いや、重役のことはいい。頼恕自身はどうであろう。この殿様はこれだけの大工事が二万両で完成すると思っっているのだろうか。

「どうじゃ、そなた……」

重役がさらに言葉を続けようとしたとき、はじめて頼恕が口を開いた。

「もうよい。」

頼恕はまっすぐ栄左衛門を見つめ、そして言葉を続けた。

「栄左衛門ゆるす。わたしの近くまでよつて参れ。」

栄左衛門は一瞬何を言われたか分からなかった。だが、すぐに、

「ははあ。」

返事をする、わずかに膝を進めて頼恕に近づいた。

「いや、そうではない。この傘の中に入れて申しておるのじゃ。そこでは雨に打たれて寒かろう。」



「しかし。」

栄左衛門は遠慮して少ししか進まない。

「早く。」

頼恕の激しい声が響く。栄左衛門は決意して、立ち上がると、

「後免。」

と叫んで進みより、傘の中で両手をついた。

「顔を見せてくれ。」

頼恕の声に、栄左衛門は顔をあげて、頼恕を見た。頼恕は栄左衛門の手をとり、そして言った。

「塩田のことは、すべてその方に任せる。どうかよろしく頼む。」

栄左衛門には、頼恕の目に光っているのは雨の粒ではないように感じられた。

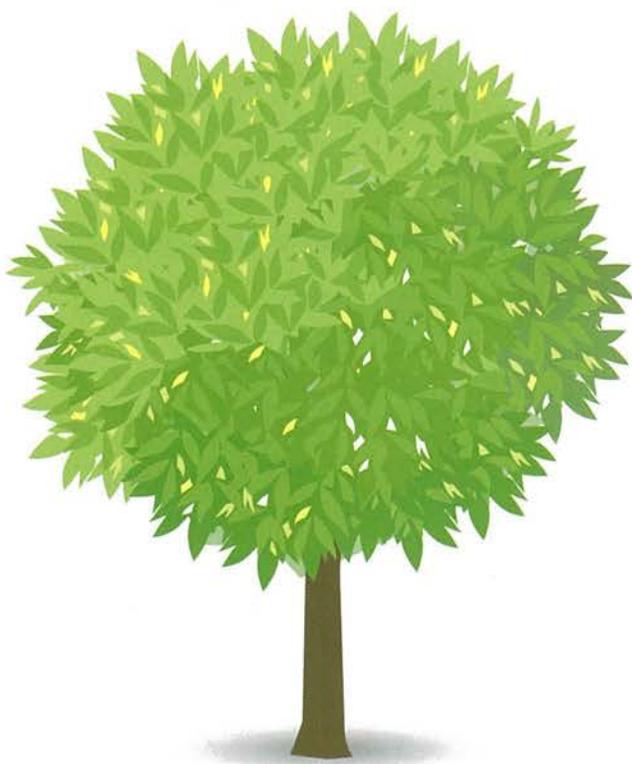
坂出塩田の工事は、一八二九年（文政十二年）

八月、完成した。着工から三年五カ月の後である。

藩主頼恕は、栄左衛門の功労を賞して、坂出墾田の碑を建立している。この碑は現在も残っており、塩田工事のころの苦難を今に伝えている。



坂出墾田の碑



1 年 組	
2 年 組	
3 年 組	